

# 移民第二世代はどう学校経験を語るか（5）

## —フィリピン系ニューカマーの事例—

○中京大学 三浦綾希子

東京大学 額賀美紗子

### 1. 研究の目的と課題

これまでのニューカマー教育研究では、主に学齢期に来日した子どもたちを対象に画一的で同化圧力が強いとされる日本の学校の中でかれらが葛藤や困難を抱える姿や、そうした学校文化に抵抗しながら戦略的に生き抜く姿が描かれてきた（例えば、志水・清水 2001, 児島 2006）。これらの研究から示唆されるのは、異質な存在を排除しがちな日本の学校文化であり、そこにおけるニューカマー生徒の疎外経験である。多くの場合、外見や日本語の不十分さなどから小学校から中学校の始めにかけていじめや仲間はずれを経験するが、同時に中学生以降では仲間集団の形成によって学校生活の困難を克服していく様子もみられる。また、先行研究でも指摘されるように（樋田ほか 2000）、こうした仲間集団の形成はかれらの学業達成や進路形成にも影響を及ぼしていた。

本報告では、青年期・壮年期を迎えたフィリピン系ニューカマー第二世代の学校経験の語りと仲間集団形成に注目しながら、かれらの学業達成の過程を明らかにする。具体的な研究課題は以下の通りである。

- ①フィリピン系ニューカマー第二世代の若者たちは小・中学校でどのような疎外感を経験したのか。
- ②かれらは疎外経験をどのようにして克服し、それがかれらの学業達成や進路形成にいかなる影響を与えたのか。特に仲間集団文化の形成に着目した分析を行う。

### 2. 対象と方法

フィリピンにルーツをもつ18歳から30代前半の若者30数名を雪だるま式に集め半構造化インタビューを行った。対象者には、日比国際結婚夫婦の間に生まれた子ども、フィリピン人母親の連れ子、日系の子どもが含まれる。学歴は高卒以下と大卒以上が約半分ずつである。

### 3. 結果

対象となったフィリピン系第二世代の若者は、外見の異質性や日本語力の不足、コミュニケーションスタイルの違い、母親が日本人でないこと、フィリピン人に対する日本社会のステレオタイプなどから小・中学校時代に疎外感を経験したと語った。ただし、疎外感の深さについては、①日比ハーフであるか（2世）／両親ともにフィリピン人であるか（1.5世）、②居住地域や在籍学校のエスニックな多様性の程度や、③教師の支援のありかたによって、個人差が見られた。

若者たちが疎外経験を克服する方法としては、①海外脱出をする、②“やんちゃ系”仲間集団を形成する、③“まじめ系”仲間集団を形成する、④多文化系仲間集団を形成する、という4つのパターンにまとめられる。海外脱出については、その脱出先がフィリピンである場合とそうでない場合があるが、居心地の悪い日本社会から逃避するために海外の学校へ進学するというパターンが見出された。帰国後にその経験と語学力を武器に学業達成する場合もあれば、海外での経験が学業達成につながらない場合もあった。反学校文化的な価値観を持つ“やんちゃ系”仲間集団の形成は、学業達成にはつながらず、早期の学業離脱を促していた。一方、“まじめ系”仲間集団の形成は学業達成を促すが、事例からは高校進学時に底辺校に入学し、そこで良い学業成績を修め、同じく学業成績の良い生徒たちと友人関係を築くというパターンが見出された。最後に多文化系仲間集団の形成だが、教会やエスニックマイノリティが集まる高校への進学を契機に多様な文化背景を持つ友人たちと仲間集団を形成し、それを居場所としていくというパターンである。フィリピン人同士で親しくなる場合もあれば、他のエスニシティの友人も含めた仲間集団を形成する場合もある。この仲間集団が学業達成を促すか否かは、仲間集団内に向学校的な者がいるかどうかによって異なってくる。また、仲間集団文化によってジェンダー秩序の形成には違いが見出され、そのことが特に女子の進路形成に影響を与えていることが明らかになった。